# 当院における妊孕性温存の取り組み

◎山口 桂子[1)]、藤田 京子[1)]、杉田 啓代[1)]、深川 隆恭[1)]、藤田 智洋[1)]
小牧市民病院[1)]

【はじめに】

近年、がん治療の飛躍的な進歩により、完治する患者が増えている。AYA 世代(adolescent and young adult)と呼ばれる 15 歳から 39 歳までのがん患者において、治療後の生活の質の向上の一つとして「妊孕性温存」が注目されている。2015 年 4 月から 2024 年 5 月までに当院で実施した妊孕性温存療法の実施状況、今後の課題について報告する。

【実施状況】

女性 15 名、男性 46 名、計 61 名の患者が受診し、3 名の胚凍結、1 名の卵子凍結、41 名の精子凍結を実施した。凍結した患者の平均年齢は男性 31.8 歳､女性 35.0 歳であった。また、温存に至らなかった男性患者の多くは射精出来ないことによる中止、女性患者の多くは採卵にかかる負担から妊孕性温存療法開始を断念する傾向にあった。患者の紹介元は院内 52.5%、他院 47.5%とほぼ同数で、診療科は血液内科、外科、泌尿器科の順に多かった。

妊孕性温存療法後の治療経過は、女性 3 名中 2 名が胚移植し、1 名が出産に至った。また、男性 6 名が生殖補助医療を実施したが、うち 2 名は治療後の射出精子に運動精子を認めたため凍結精子は使用しなかった。凍結精子を用いた 4 名中 2 名が出産に至り、残りの 2 名は結果が出ず他院に転院となり、凍結精子を移送した。

【今後の課題】

妊孕性温存療法後、一度も更新を行わなかった患者の割合は 16.2%であり、原疾患治療後に精液検査を行わない患者が多く、熟慮せず廃棄を選択している可能性も考えられるため、再検査目的での受診率向上に向け、案内方法の変更を検討していきたい。

また当院は、妊孕性温存療法実施医療機関として現在登録されておらず、多施設への周知の機会がなく、院内での認知度も薄れている様に感じている。当院に入院中の患者など負担が軽減される患者もおり、今後も施設選択の候補として検討して貰えるようホームページの充実を図るなど積極的に取り組んでいきたい。

連絡先：0568-76-4131（内線 5259）